

受難の歴史 上手に折り重ね

長崎県オペラ協会「いのち」

長崎県オペラ協会が新国立劇場に招かれ、東京公演をした。2013年に長崎で同協会が初演した「いのち」。台本構成は星出豊、作曲は錦かよ子(7月25日)。

大作である。全3幕で正味2時間強。17人のソロ歌手、混声合唱と児童合唱、管弦楽にバレエも加わる。このポリュームで長崎の受難をこれでもかと叩きつける。キリシタン弾圧にまで遡る。重苦しい合唱。嘆きの深さ。そして70年前の8月9日の惨劇へ。決して象

音楽評論家 片山 杜秀

徹的にぼかさない。ピカと来てドンと来る。管弦楽の轟音と合唱の叫び。

さらに生き残った者を原爆症の不安が苛む。主人公は被爆した看護婦。彼女に惹かれるのは、戦後に長崎へ来た「よそ者」の医師。2人の愛の物語に、長崎を舞台にしたプッチーニのオペラ「蝶々夫人」がかぶる。その音楽が実際に引用される。「よそ者」がピンカートンで、看護婦が蝶々さんというわけ。

この重ね合わせがはま

る。悲しい別れが待つのも同じ。しかし「いのち」の看護婦は蝶々さんのように自死するのではない。愛の力に支えられ、死の恐怖に清くけなげに立ち向かい、放射能に殺される。そのときいのちの尊さが誰の胸にも迫るだろう。錦は後期口マン派風の死から浄化に向かう音の身ぶりを使い、明るく透明な悲しみで耳を満たす。

長崎のもろもろを上手に折り重ねた星出の台本の書き方は、とても説明的。橋田壽賀子のテレビドラマかと思えば、台詞が多い。オペ

ラの台本ならもつと言葉を詰めると普通は思う。が、これは計算ずくらしい。錦の作曲がそんな台本を生かしている。素早い語りで処理する部分とテンポよく節づけする部分を絶妙に案配し、サクサク進む。しかも、過剰とも思える台詞の分量がかえって功を奏し、ドラマが分かりやすい。

松本佳代子、加々良弦、松尾敬ら、歌い手は日本語がうまい。管弦楽は長崎を本拠とするOMURA室内合奏団。これも上手。指揮も演出も星出。彼は長年、地方の歌劇運動に献身してきた。ベテランの味が台本も含めて存分に出た。これぞ長崎のオペラ。(寄稿)